

宗教史跡の観光資源化

—— 沖縄県南城市の地域振興政策を事例に ——

吉 野 航 一

本発表では、沖縄県南城市の宗教史跡を用いた観光による地域振興策を事例に、南城市、日航財団、日本代替・相補・伝統医療連合会議（JACT）は、どのようにこの事業に関与していったのかを沖縄観光を取り巻く社会状況を踏まえて明らかにし、日本と沖縄における「沖縄観光」の社会的配置を検討する。そして、地域振興を「観光」に期待することの問題について考察する。

南城市は、二〇〇六年に佐敷町・知念村・玉城村・大里村が合併してできた新しい市である。この合併を機に、南城市は地域総合整備財団（ふるさと財団）の「地域再生マネージャ事業」を利用して、琉球王国の歴史と結びついた宗教史跡を「（観光）商品化」することで、「観光」による地域振興を進めていった。この事業は、観光によって地域社会を活性化させたい南城市だけでなく、「沖縄イメージ」が売り尽された中で新たな沖縄観光（新たな「航空文明」）を開発したい日航財団と、新たな価値観・対抗文化である「統合医療」を一般社会に広めたいJACTの三者が持つ思惑が重なり合う中で実施された。

南城市にある最も有名な宗教史跡が、二〇〇〇年に世界文化遺産（「琉球王国のグスク及び関連遺産群」）の一つとして登録

された「斎場御嶽（せーふあーうたき）」である。南城市は、「スピリチュアル」「パワースポット」といった近年流行している言葉を使って、斎場御嶽や南城市自体を表象していった。そして、斎場御嶽は、世界遺産に登録された時点では重要な観光スポットとして認識されていなかったが、ガイドブックの影響もあって、それは「訪れるべき観光地」に変容していった。

また、南城市は、沖縄観光が「健康」「癒し」と結び付けられている現状を踏まえ、観光による地域振興のためには「住民は健康でなければならない」という至上命題に直面した。南城市は、この問題を解決するために「統合医療」を利用した。一方の統合医療を主張するJACTには、主流文化の一員となった「スピリチュアル」「癒し」に接続して公共団体の事業に組み込まれることで社会的認知を獲得したいという意図があったと考えられる。

この南城市の「健康化」は、沖縄観光にとって「健康」は必要不可欠な要素であるという沖縄側の思いと、「沖縄の健康」は「日本の健康」に繋がっているという日本本土側の思いによって構築された。「沖縄」は「日本の平和」だけでなく「日本の健康」のために貢献しなければならなかった。しかし、この事業の主要目的であった「観光」を通しての地域活性化と宗教史跡と結びつけた「統合医療」の推進は、南城市とJACTの考え方が乖離したこともあって、この事業では実質的には実施されなかった。実際に実施された地域住民の「健康増進」に関する事業（ノルディック・ウォーキング）や宗教史跡の「再活性化（保存と認知）」に関する事業（案内板等の設置）は、観

第16 部会

光・スピリチュアル・統合医療と題されなくても十分に実施可能なものであった。

沖縄や南城市だけでなく、様々な地域社会が「観光」による地域振興に期待する。しかし、南城市の事例は、地域社会が抱える問題の解決のために「観光資本」と「観光客」がホスト社会に流入することはないという現実を再認識する必要を思い起こさせる。その性質からして、観光客や観光資本が観光地（他者）の「問題」をわざわざ抱え込むことはない。観光化に直面する地域社会は、観光に期待しつつも、「観光」と「地域振興」は異なる文脈と意図の下で実施されるということを踏まえる必要がある。このように「観光」を理解することは、多様なアクターと意図が混在する「観光」を解体することで、当該社会にとって適切な「観光」を再構築あるいは「観光」から離脱する作業に繋がっている。